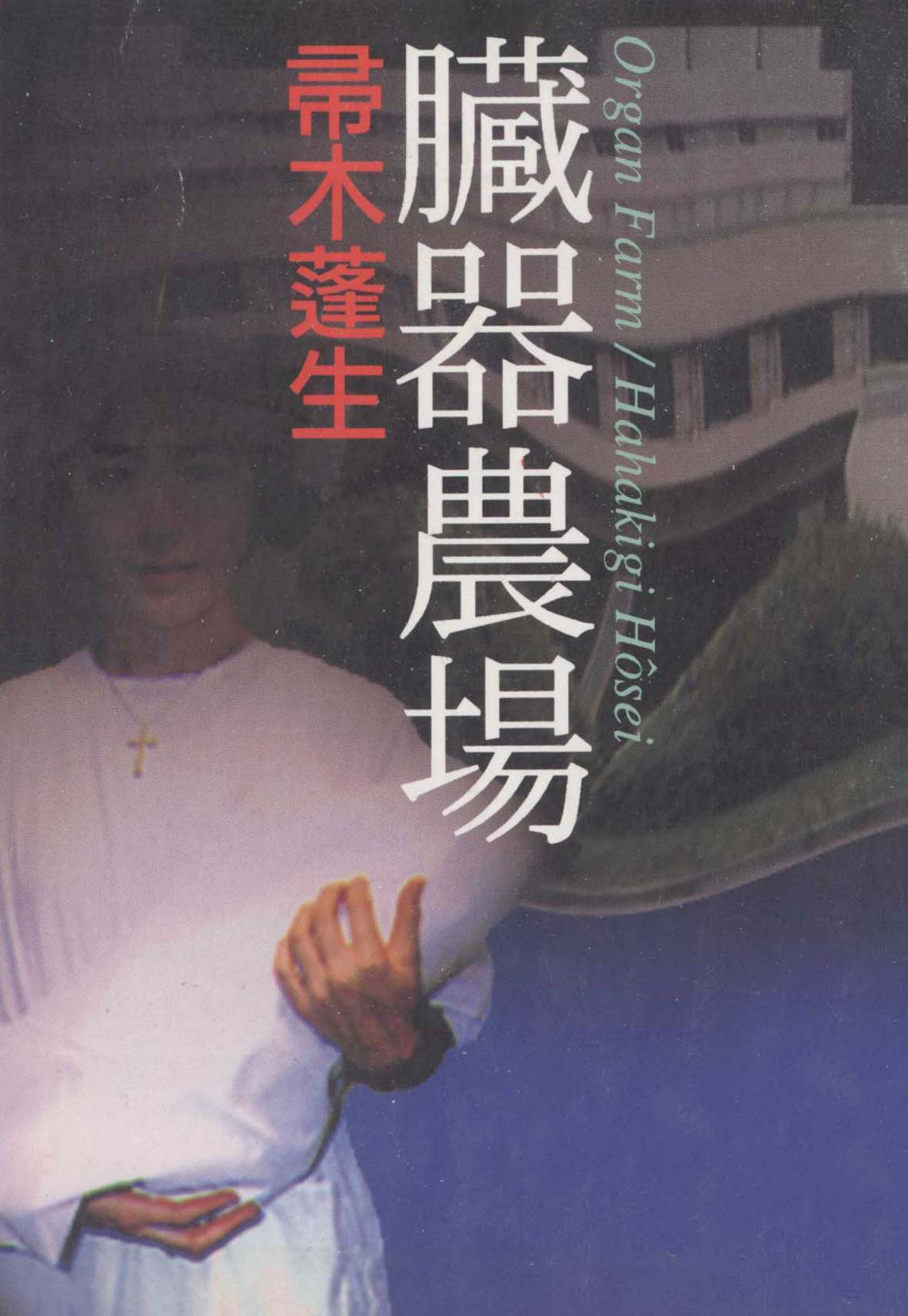


Organ Farm / Hahakigi Hôsei

臓器農場

帝木蓬生



ぞう 臓 器 きの のう 農 じょう 場

新潮文庫

は - 7 - 6



平成八年八月一日発行

著者 帚木蓬生はきぎ ほうせい

発行者 佐藤隆信さとう たかのぶ

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部(〇三)三三六六―五四四〇

読者係(〇三)三三六六―五一一一

振替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Hōsei Hahakigi 1993 Printed in Japan

ISBN4-10-128806-2 C0193

〔庫〕

場 農 器 臟

著 生 蓬 木 帚

版 社 潮 新

5744

臟
器
農
場

Organ Farm

規子^{のりこ}は走った。

初日は三十分か一時間の余裕をみこんで出勤しようと、めざましを五時にあわせていた。起きたとき、部屋の中は不吉なくらいに明るかった。あわてて時計を見ると七時を少しまわっていた。めざましが鳴らなかつたのかどうか確かめにかかったが、途中でそんな暇さえないことに気づいた。ふとんをはねのけて、顔を洗いに立った。

台所から母親が、朝食をとるのかときいた。返事のかわりに、なぜおこしてくれなかつたのかと文句を言つてやつた。

「だって初日でしょう。あなたが起きてこないから、てっきり遅くてもいいのだと思って」
「どこに初日が遅くてもいい職場がある？ 勤めた経験のないひとはこれだから」

あまり急いでいたので口紅をひくのに失敗した。ふきとつてもう一度やりなおした。それも出来がよくなかつたが、あきらめた。ルージュのほかは乳液をすりこんだだけだ。

部屋にもどってパジャマを脱ぐ。ブラウスもスカートもストッキングも、前の晩用意していたのが幸いした。カーディガンは壁につるしているし、ハンドバッグの中味も点検済みだ。五、六分後に家を出て、走れば七時四十分のケーブルカーにまにあう。八時に（二の駅）についたあと、さらに走って八時十分に病院にはいる。更衣室で着がえて階段をかけあがる。八時半からの院長訓辞にはすべりこめるだろう。

「ノリコの病院のことが新聞にのっているよ」

母親が言った。

「新聞を読む暇はないの」

「でも、あなたが勤める病院だから」

規子はストッキングを丸めながら、テーブルの上の新聞に眼^めをやる。

〈多臓器移植に成功——聖礼病院で〉という見出しが眼にはいった。

「帰ってから読むのでとっておいて」

「なかなか立派な病院のようね」

母親のほめ言葉が、いらだった気持をいくらかしずめた。

腕時計をはめながら靴^{つら}をはいた。

「今度からはちゃんと起こしてくれないとダメよ」

玄関先まで見送ってくれた母親に、ふくれっ面^{つら}をしてみせた。

走りながら少し言いすぎたかなと思う。一緒に生活していると、いつも文句ばかりいつて

いる感じだ。

サンザシ公園の中をぬけて近道をし、金物屋の前を駆けくだる。歩道に、早咲きの紫うつぼがはみだしている。どの店のシャッターもまだおりたままだ。

大通りはまっすぐJRの駅までのびていた。明治のはじめ、製鉄所ができたのと同時につくられた道で、中央分離帯のシュロ並木は電柱よりも高い。

高校時代も毎朝この道を走った。ひと列車遅れると十五分の遅刻になって、トイレ掃除をさせられた。掃除が嫌で一生懸命走った。信号にかからなければ駅までほぼ十分で行きつく。「お願いだから美容院の前だけは走らないでくれ」と母親がある日頭を下げた。たまたま店の前を掃除していた美容師が、規子を見てびっくりしたらしかった。「カバンを抱え、スカートをひらめかせて走ってくる背の高いセーラー服の子がいるので、誰かと思うと、おたくの娘さんだった」と、母親に耳うちした。「陸上部にでもはいつているのでしよう。あの走りっぷりは並のお嬢さんにはできない」とまで言ったそうだ。

所属していたのは陸上部ではなく卓球部だ。朝のかけ足のおかげで、高校三年の校内マラソンでは三位になった。一位は陸上部、二位はバドミントン部のレギュラー選手だった。

医療短大の三年間は寮生活で、この道をかけたことはない。そのブランクのせい、喫茶店ばんじろの前まで来ると、早くも息が切れかかる。まだ三、四分しか走っていない。

角を曲がって腕時計に眼をやった。七時三十六分。すぐ目の前に三角屋根の「一の駅」が見えている。ラストスパートだと思って走る。

改札口を通過した瞬間、ベルが鳴りだした。もう一度小走りになり、踏切を渡って車内にかけこむ。車掌がじろりとこちらを見た。

規子が坐^{すわ}るのを待っていたかのように、力強い音をたててケーブルカーが動きだす。

背中をひきあげられる感じがして、規子は後ろをふりむく。四十人乗りの車廂に乗客は十人くらいだ。雛段^{ひなだん}に似た座席がせりあがっている。顔みしりはいなかった。同じ短大の看護学科から四人が聖礼病院に就職していたが、二人はマイカー通勤、一人はバス通勤にしていた。

規子はまだ車の免許をもたない。しかしたとえもっていたとしても、ケーブルカー通勤にしたはずだ。それほどケーブルカーは身近な乗物だった。子供のころ、休みごとに父親がケーブルカーに乗せてくれた。学校の遠足も、ケーブルカーを利用して山頂の公園まであがった。

だから三年前に、山の中腹に新しい総合病院ができると聞いたとき、まるで自分のためにつくられるような気がしたのだ。就職するなら絶対その病院で、通勤もケーブルカーだと決めていた。

規子は改めて車内を見まわす。車掌と目^めがあい、規子はどうぞよろしくというつもりで会釈^{しやく}したが、相手は視線をそらせた。小柄^{こがら}な身体^{からだ}に大きな頭をもつ彼が勤務^{かむ}しだしたのは数年前からで、初めは何ヵ月か六十年配の車掌がつきそって手取り足取りして教えていた。

それがこの頃^{ころ}では立派^{りっぱ}にひとり立ちして、名物車掌になっている。時間に厳しく、定刻を

過ぎれば、かけこんでくる乗客など決して待つてはくれない。かと思うと、老人には手をか
し、坐っている若い乗客を無理に立たせて、席をつくってくれる。特にうるさいのが車内の
ゴミだ。チューインガムの包み紙を床に捨てようものなら間髪をいれずに近づき、軍手をし
た手で拾いあげて、胸からつるしたカバンの中にいれる。大げさな仕草に、捨てたほうがき
まり悪そうに顔を赤らめる。

単線のレールを下に吐き出して、車体があがっていく。

電車とも地下鉄とも異なる独特な音が足元に響く。歯車のかみ合う町工場の音にも似て、
規子はなつかしさを覚える。

右側は切り通しの崖、左側はうっそうとした森で、杉やブナ、楠、つげなどの大木が密生
している。イノシシが生息しており、民家の家庭菜園が食い荒らされることもしばしばだ。

山には桜の木もある。麓から山肌を眺めると、満開の桜は白っぽい点として見分けられる。
まだ小学生の頃、両親と姉と四人で桜の巨木を見に行ったことがある。道を知っているのは
父だけだった。簡保センターに通じる舗装道を途中まで登り、踏みつけ道を三十分くらい進
むと杉木立が切れ、目の前がパッと明るくなった。見上げると、桜の枝が空を覆いつくし、
赤味がかった桜の花がテントを張ったように広がっていた。陽の光が、桜の花びらを素通り
して一層明るさを増していた。規子たちの他に誰もいない。森閑として、花びらの落ちる音
さえ聞こえてきそうだった。

その後何度かあの桜を訪ねる話ではだが、父親の単身赴任や、姉の就職、母の腰痛などで

実現しなかった。高校三年のとき、父親が赴任先で倒れ、癌死^{がんし}してからは花見の話は完全に途絶えた。

病院に慣れたら、当直明けの帰りに、あの桜の木を探してみたい気もする。ケーブルカーが〈二の駅〉につく。

規子は改札口をぬけ、駅の階段をかけくだる。走っているのは規子だけだ。

つつじのある歩道が二、三百メートルつづく。右下には市街地の町並とＪＲ線、高速道路、そのむこうに製鉄所、さらに入江、海と、眺望^{ちやうぼう}がひらけている。

息切れする頃には、もう聖礼病院の全貌^{ぜんぼう}が視野にはいるところまで来ていた。

病院は双眼鏡の形をしている。水平に倒した二つの直方体が入院病棟で、それぞれ南北のブロックに分かれ、まん中を空中廊下がつないでいる。

二つの平行する直方体を、三階建ての建物が支えている。外来や中央検査室、講堂、事務部門、礼拝堂などがそこにおさまっていた。

規子はようやく走るのをやめる。八時十五分だった。通用門から病院内にはいった。

地下のロッカールームに、規子と同じ新人看護婦が五、六人待機していた。

白衣に着替える。梳^すき忘れた髪をブラシで整え、キャップをかぶった。

「ノリコ、心配したわ。交通事故にでもあったのじゃないかと思って」

看護学校で一緒だった優子が、後ろから鏡をのぞきこみながら言った。

「ケーブルカーで来たの」

「ケーブルカー？」

「そう、ケーブルカー」

規子はふり返って笑う。「事故の心配もないし、混みもしない。景色も抜群。海のきらめくのが見えた」

「のんきね。私たち心配したのよ。いったん講堂にあがってトモコやカオリにきいても知らないっていうので、また戻ってきたの」

「ごめん。あしたからもう一台早いのにする」

優子とつれだつて階段をのぼった。

「ユウコ、何かない？」

優子は、カバンや白衣のポケットにキャンディの類をいつも入れていた。

「もうお腹すいたの？」

「朝食べる暇がなかった。アレも始まることだし、お腹すくのよ」
初出勤の緊張のせいで生理が早まりそうだった。

優子はポケットから赤い包み紙のキャンディと、チョコレート・キャラメルを取り出す。

「ありがとう」

「ノリコはいいわね。甘いものをどれだけ食べても太らないから」

「体質よ、体質」

確かにダイエットなんかしなくても体重は四七キロで変わらない。一六三センチあるから

五〇キロを越えてもいいと思うのだが、なかなか大台にはのらない。反対に一五〇センチしかない優子は、五五キロを越えたといつては大騒ぎをし、ときどき昼食がわりにキャラメル一個というようなダイエットをしている。

とはいえ、「体質だ」と答えたものの、七つ年上の姉は結婚してからみるみる太りだし、母親は胴回りにしめ縄なわを二本巻いたような肉の皺しわができる。亡なくなった父親も中年太りだった。「体質」に甘えていると、自分もいつかシッペ返しがくるような気がする。

講堂にはもう三十人近くが整列していた。全員が立ったままだ。教育主任がしきりに腕時計を気にしている。やせて眼めの鋭い彼女に、規子は面接試験のときからあまり好感をもてなかった。

教育主任は、新人看護婦のキャップの位置、胸ポケットのハンカチーフ、名札の有無をひとりひとり点検していたが、扉とびらにノックがあるとんでいつて、うやうやしく開けた。

小柄で白髪かみの院長がはいつてくる。あとに大柄な総婦長がつきそつていた。

院長は柔和な表情で新人たちを見まわした。金縁眼鏡の奥の目は線で引いたように細い。

「院長の亀山かめやまです」

壇の上にもものぼらずに、気さくに話し始めた。

「今日からあなたたちは、私ども聖礼病院の一員となります。あなたたちはいずれも今春看護学校を出た、いわば生まれたばかりのナースです。生まれおちた環境がどんなに大切であり、その後の感覚や判断力を決定するかということ、インプティングという言葉で動

物学者が表現しています。ネコでもイヌの母親に育てられると、自分をイヌだと思ってネコを恐^{こわ}がるようになるのです。縫いぐるみの白鳥に拡声器をつけ、人工音を出しながら餌^{えさ}をまいていると、動かない縫いぐるみを親鳥だと思ってしまいます。幸い、みなさんがこれからインプリンティングされていくこの病院は、縫いぐるみではありません。創立三年にしかない新しい病院ですが、医療スタッフも事務職員も、研究員たちも、私どもがヘッドハンティングをして集めた人材です。刷り込みの場としては、最適の病院だと私は胸を張って言えます」

院長はゆっくりと演説し、微笑する。目がいいよ細くなる。

「けさ新聞を読んだ人、手をあげて」

突然の質問に三分の一ほどが手をかかげる。うしろのほうで、規子も顔のあたりまで手をもちあげた。

「ナースはどんなに忙しくても、出勤前に新聞は読んでおくべきです。医療職というのはつきるところサービス業なのです。それはコミュニケーションをぬきにしては成立しません。患者さんとの交流は、ほんのちよつとした話題がきっかけになります。そのためにはその日の新聞が一番です」

院長は軽く咳^{せき}ばらいをする。「今日の朝刊に聖礼病院のことが出ていました。地方紙だけでなく、全国紙も同時にとりあげていたから気がついたでしょう。記事を読んだ人は？」
規子は再びこわごわ手をあげる。母の勧めでほんの数秒間目を走らせたただけだが、読んだ

のにはかわりがない。

「どんな内容でしたか」

院長から指名されて、最前列にいた同僚が自信なさそうに答えた。

「脳死の赤ん坊から臓器を取り出して移植した記事だったように思います」

「そう。どんな臓器が移植されたのでしょうか」

院長がさらにきく。

「心臓、腎臓、肝臓——」

同僚はそこで言いよどんだ。

「あとは肺臓と角膜です。心臓と肺は同じ患者に移され、角膜と腎臓はひとつずつ別の患者に移植されたので、全部で六人の患者が恩恵を受けたことになります」

院長は出し惜しみするように説明した。まわりに立っていた総婦長と教育主任も相槌をうつ。

「私が強調したいのは、聖礼病院はそれだけの手術ができるスタッフをもっているということです。国立病院や大学病院でも、そこまでやれるところは稀まれです。マスコミがこぞって記事にしたのもそれが理由でしょう。皆さんが今日から勤務されるのはそういう病院なのです。患者さんの苦痛を少なくするために最先端の医療を提供するのが、私たちの使命です。私は、そのためにはどんな犠牲を払ってもいいと思っています。聖礼病院は民間病院です。親方日の丸の病院ではありません。経営的にもなりたっていないかねばならないのですが、患者さん中

心の医療をやっているれば、おのずから経営の道も開けてくるものです」

院長は自らうなずき、規子たちをじっとみつめる。

「最後にひとつだけ、私の望みを言っておきます。できるだけ患者さんのそばにいてあげて下さい。仕事を終えて帰るとき、今日はどれだけ患者さんのそばにいたか反省してみて満足できるような勤務を、私は皆さんに期待しています。以上です」

軽く会釈したあとスタスタとドアの方に行きかけ、思い出したようにふり返った。

「私の部屋は北ブロックの六階です。何か相談事があればいつでも来て下さい。ドアはいつもあけたままです」

院長を廊下まで送り、戻ってきた総婦長は、太った身体を揺すりながら壇上にあがった。大きな顔に、キャップがリボンのように小さい。

「配属先を発表します」

白衣のポケットからメモと眼鏡をとりだしたとき、一瞬ざわめきがおこる。誰も口にはしないものの、どこに配置されるかは規子たちの最大の関心事だった。

外科病棟、内科病棟に続いて、小児科勤務者が読みあげられ、そこに規子の名前もあった。内心で手を叩きたい気持だった。優子と一緒に第一希望は小児病棟、第二希望は産婦人科病棟にしていたのだ。

「ノリコ、よかった」

と言った優子も、産婦人科病棟のところで名前を呼ばれた。